



国際人として活躍したジョン万次郎 上陸の地に世界に誇るランドマーク誕生 糸満市大度浜海岸に銅像、イラスト板、園路などを整備



ジョン万次郎上陸之碑建立事業

平成30年2月、観光振興や人材育成を目的に、ジョン万次郎がアメリカから帰国する時に上陸した大度浜海岸に、足跡を伝える銅像やイラスト板、園路などを整備しました。



ジョン万次郎宿道

ジョン万次郎上陸之碑建立事業に関する取り組み

ジョン万賞

国際的な芸術の人材育成と環境整備を目的に「海のいきもの」をテーマに1年に1点若手作家による石彫作品を上陸之地記念碑周辺に設置しています。



第二回ジョン万賞
「Onda agitada」荒波

第一回ジョン万賞
「FLYING FISH
-ジョン万次郎が与えた
希望-」



ジョン万次郎宿道探索ウォーキング

ジョン万次郎が歩んだ大度浜海岸から豊見城市翁長までの足跡(12km)を辿り、偉大な業績への道のりを探索します。※毎年2月第1日曜日、開催予定



※NPO 法人ジョン万次郎上陸之地記念碑建立期成会により行われています。

ココがこだわり！ジョン万次郎上陸之碑

指差す方向は、生誕の地・土佐清水市がある方向



左手に持つ2冊の本は、「ジョージワシントン伝記」と「ボーディッチ航海術書」



台座の銘板と説明板のタイトルの字体は、明治時代のころの明朝体を再現した「オランダ明朝体」



アドベンチャー号の説明サインの上にある石は、帰国資金を稼いだ金山があるサクラメントの石



1851年2月2日、大度浜海岸沖約8*で本船サラボイド号からジョン万次郎ら3人が上陸用に移ったボート、アドベンチャー号実物大のマーキング



ジョン万次郎上陸

民主主義の始まりの地、糸満市



記念碑が整備された平成30年は、明治元年から起算して満150年の節目に当たります。

平成30年、上陸の地・大度浜海岸に記念碑誕生。

ジョン万次郎の足跡

土佐、アメリカ、琉球、そして日本へ



1 土佐

漁に出て嵐に遭い漂流 無人島生活を経て捕鯨船に救助される

万次郎は、土佐（土佐清水市）で生まれました。1841年、14歳の万次郎と仲間たちが漁に出たところ、嵐に遭い漂流しました。その後、太平洋の孤島に漂着し、143日後、アメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号によって救助されました。ウィリアム・H・ホイットフィールド船長は、万次郎たちを安全なハワイへと連れて行きました。



6 翁長

翁長村の高安家へ 「いちやりばちよーでー」に触れる

万次郎たちは、取り調べ後に豊見城間切翁長村の高安家で幽閉されました。半年間に及ぶ捕らわれの身ではありませんでしたが、村の綱引きに参加するなど、村人たちと自由に交流することができました。また、琉球国王からの手厚い保護のほか、豚、魚、泡盛、衣服を贈られるなど、多くの人たちの「いちやりばちよーでー」精神に触れることができました。



7



封建社会の日本に 民主主義を伝える

幽閉されていた万次郎たちは、琉球王府の役人により取り調べを受けました。その時、通事・牧志朝忠は、特にジョージ・ワシントン伝記に興味を持ちました。伝記には、アメリカの民主主義社会の制度や人権尊重について書かれていました。そのようなことから、万次郎が封建社会の日本に持ち帰ったかったのは、自らが体験した民主主義の思想だったとも考えられています。



2 アメリカ

アメリカ本土に上陸 日本人初の留学生誕生

1843年、万次郎は1人、アメリカ本土へ上陸しました。ホイットフィールド船長は、万次郎をふるさとのフェアヘブンに連れ帰り、英語や航海術などの教育を受けさせました。ここに、日本人初の留学生が誕生しました。学校を卒業した万次郎は、捕鯨船フランクリン号に乗って7つの海を航海し、副船長にまでなりました。



5 摩文仁番所

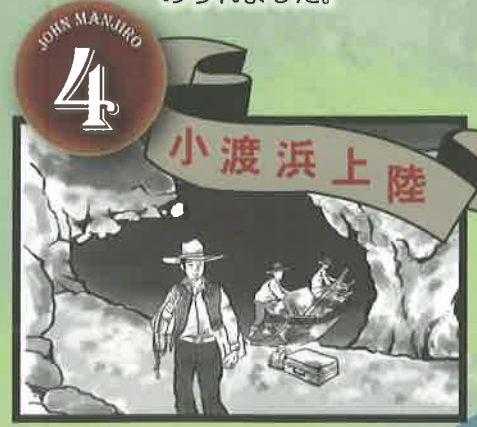
摩文仁番所で取り調べ 荷物には本や地図、 ピストルも

万次郎たちの荷物はすべて、摩文仁間切番所の役人によって没収され、番所に運ばれました。荷物には、航海術書、ジョージ・ワシントン伝記、地図、コンパス、ピストルなどがありました。役人たちには、見たことのない品物ばかりでした。また、役人からご飯とお箸を渡され、3人とも上手に使いこなしたことから、日本人であることが認められました。



日本帰国の決意 金山で600ドル稼ぐ

1850年、カリフォルニアで起こったゴールドラッシュのことを知った万次郎は、日本へ帰国するための資金を得ようと、サクラメントの金山に向かいました。そこで600ドルを稼ぐと、ハワイに戻り捕鯨ボートを購入し、「アドベンチャー号」と名付けました。そして、万次郎、伝蔵、五右衛門の3名は、上海へ向かう商船サラボイド号へ乗船しました。



4

小渡浜上陸

琉球王国・小渡浜に上陸

上陸した小渡浜（大度浜海岸）で万次郎たちは、浜に集まってきた村人たちから、温かいふかしイモなどをごちそうされました。万次郎たちは、親切な村人たちのもてなしに感謝の気持ちで胸がいっぱいになったといいます。また、万次郎たちは、持ってきた牛肉やコーヒーを火に掛け、その場で食してみせました。



小渡浜

8

万次郎の功績

国際人として活躍 そして開国へ

万次郎は、漂流から11年ぶりにふるさとの土佐に帰りました。ペリー提督が黒船を率いて現れた時、幕府は万次郎を直参として江戸に呼び寄せました。万次郎は、開国への熱い思いを込めて、老中らの前でアメリカの事情について話しました。その後の万次郎は、翻訳、測量、捕鯨などを主な仕事としていました。明治新政府になっても、普仏戦争の視察として海外出張を命ぜられたほか、東京大学の前身「開成学校」の英語教授に就任するなど、国際人として活躍しました。



3 いざ、琉球へ

日本帰国の第一歩 アドベンチャー号でいざ琉球へ

1851年2月2日、北風が吹きみぞれが降る悪天候の中、万次郎たちは糸満市喜屋武岬の沖合でアドベンチャー号を降ろし、陸地を目指しました。深夜、海岸に着くと干潮だったため浜には行けず、仕方なく岩礁にいかりを下し、朝まで一眠りしました。朝になると、近くにいた釣り人の指示に従い、万次郎たちは小渡浜に上陸することができました。